

なつみの旅

今日 あした

インドネシア旅行の一日、なつみと夫の有一は早起きをして、世界遺産のポロブドゥール遺跡に行った。

ここは、八世紀に建てられた巨大な仏教寺院の跡で、それ以外のことは何もわかっていないそうだ。

いつの頃からか、ジャングルに覆われ、守られて、今よみがえって二人の前に、美しい姿を現している。

階段状に聳える壁面に彫られた經典の絵物語、大きな剥き出しの仏像、透かし彫りの石籠で覆われた中に鎮座する仏像などが点在する巨大な建物は当時の芸術、文化の質の高さを物語っている。

ここは何なのだろう。赤道直下のこの場所で、人が雨露をしのげる場所はどこにも無い。

見る人に畏敬の念をおこさせるだけのモニュメントなのだろうか。

それとも当時の参詣者は、直射日光をもとめせず、広い石畳で、寝泊りしたのだろうか。

現在によみがえった、高い位置にある寺院跡の眼下には、今尚、広大なジャングルが広がっている。

こんな大寺院の周りにはかつては大都市があつたに違いない。ここでどんな栄枯盛衰が繰り広げられたのだろうか。

なつみと有一は、寺院の石の床に座り込み、しばし沈思黙考。

ジャングルは何も語ってくれない。

なつみと有一の間には子がいない。医者に相談をしてあらゆる手を尽くしても出来なかった。今年で結婚二十五年目、まだ希望はあると医師に言われたので諦めたわけではないが、途中からは、子のいない生活をエンジョイしている。

そして今年は銀婚式。鍵ひとつでセキュリティーバッチリのマンション住まい。介護の必要な親兄弟もいないし……。

どうせ行くなら辺鄙な、謎めいた所が良いね。

という訳で、このガイド付きツアー旅行となったのだ。

本当に来て良かった。

この遺跡をみると、いまもなお、精緻な美しさをとどめている建物を生みだした過去と、何故か滅びてしまった得体の知れない過去に、怖れのようなものを感じずにはいられない。

現に、こんなに巨大な仏教寺院を造り、盛り立ててきた過去の人々は、自分ひとりでは持ちきれないような夢や、怖れを抱いたからこそ寺院を造り懸命に祈ったのだろう。

それが何故か滅びてしまった。

ジャングルの中からこの遺跡を見つけた人々は、土地を掘り起こし、過去の証拠をたくさん見つけ、滅びた原因や、そこで暮らしていた人々の道程を何年もかけて徹底的につきとめたことだろう。それでも……

人は、心配の種を捨てず、恐れおののきながらも、夢も希望も持ち続けひたすら祈り続けるのだろう。

こんなに人里離れた観光地でも、現地の子供達は観光客にお金をねだる。

陽気なアメリカ人が、その子供達に小銭をあげて、何人も従わせて歩きまわっている。

子供達は無邪気な顔になり、嬉しくてたまらないように体をウキウキ躍らせながら、優しいアメリカ人の周りを駆け回っている。

なつみと有一は、笑いながらそのおかしな行進を見て遺跡を後にした。

ツアー客の私達は、埃っぽいこの土地から隔離されたような観光客用の豪華なホテルに戻って、おそい朝食をとった。

それから、ブーゲンビリアのピンクの花が咲き乱れる中庭のプールでひと泳ぎ。デッキチェアに寝そべって、パラソルの周りに広がる少し黒ずんだ青い空を眺める。

まるで女王様になった気分だ。

八世紀のこの土地で繰り広げられた生活のなかにも、こんな光景はあったのだろう。

常夏の国では、きっと水浴はあたりまえのことだったに違いない。

現代の私たちが享受している文化を、凌いでいたかも知れない。

私達は、つかの間の王侯気分を味わいながら、夢のような現実と、はるか過去の想像の産物を重ね合わせて、夢うつつの時を過ごした。

そして、午後からは、街に繰り出した。

とは言え、ガイドつき、ミニバスつきの、超安全モード。

車窓から見えるジョグジャカルタの町は一昔前の日本のようだ。ほこりっぽくて広い道路の両側には、二階建ての家が建ち並んでいる。

たくさんの自転車が我が物顔で車の前を横切って行く。

現地のヒンズー教の人々は、明るい太陽の下で人々を苦しめる悪魔と、夜、地下から這い出してくる魑魅魍魎から身を守るために、花や、貢物を門前に奉げて、一日に何回も神々に祈るそうだ。

言われてみれば、どの家にも入り口の隅に花やくだものが供えてある。

そんな街中を走りながら、ガイドが

「これからとりの市場に行こうと思いますが、もし嫌だったら辞めますよ」と言った。有一が、

「ぜひ行ってください」と、打てば響くと言った感じで大きな声で応えた。

そういわれて、「築地の市場」を連想したなつみは、

「市場に行くのになぜいぶんものしいのね」と、有一に耳打ちをする。

「あの、SARSで有名になった市場と同じようなものだよ」

そういえば、ここに来る時、成田空港はがらに空いていた。中国にはSARS患者が増えていて、その原因が、市場で売られているハクビシンではないかといわれていた時期なのだ。

「どんなところだろう」

恐いもの見たさで、なつみもわくわくしてきた。

「有一、よくぞ言ってくれた」なつみも好奇心では負けていない。

ツアー客の中には、二の足を踏む人もいたのだった。

そこは築地の市場をもっと狭くしたようなところで、人がひしめいている。

はじめに目にしたのは、ただの野菜や果物を台の上に所狭しと並べた八百屋。

丸い木の椅子に座って買い物客とおしゃべりをしている店員に、犬がまとわりついてる。

「なんだ、犬は食料だと聞いていたのに、やっぱりペットじゃないの」、などとなつみが言っていると、有一が上のほうを指差した。

イグアナだ。物がうずたかく積み上げられている中の一つの籠に、ワニを小型にしたような堅そうな皮膚を四つんばいにして、首をもたげている。

これは、よくよく見ないと見落としてしまったら大変だ！と目をこらす。

籠に入った小動物や昆虫などを見つげながら先に進むと道は縦横に分かれている。

どの道にも人があふれかえっている。体がふれてしまいそうなほどの近さに、

片足を鎖につながれたフクロウがいる。

大きな猿が頑丈そうな鉄のおりの中で目だけギョロリと動かしている。

こうもりは、まさにコウモリ傘のように、骨ばった羽をたたんで、何羽もまとめて上からぶら下がっている。

狭い道の四つ角の隅に大きな樽がおいてあった。見ると、蛆虫がいつぱいに入っている。

さすがに、気分が悪くなつて、もう何も見ないで足早に市場を通り抜けた。

ここで売られている鳥や昆虫、動物達のほとんどが生きたまま売られてゆくぞうだ。

あんなに暑くて埃っぽいところに動物がひしめいているのに、においが気にならないのが不思議だった。

熱帯の島に住む人々は、この市場でこれらのものを買って帰り、家でそのまま飼い、そのえさになるものも飼い、必要に応じて使う。

巷ではグロテスクと思えるような動物や、とり、昆虫なども、ペットにして楽しんで、戦わせて娯楽として使ったり……。

またそれをえさにしたり、人間が食べたりと、こころゆくまで買ってきたものを堪能する。

とりの市場からこんな構図が、見えてきた。

SARS騒動で「市場」のニュースを見たときは、人間はなんでも食べる「傲慢な悪鬼」のように思ったが、そうではなく与えられた環境の中で、ごく自然にすべてをまかなっているのだろう。

「さいわいインドネシアには、ハクビシンは生息していないそうだから、この島の人たちが直接SARSの被害をこうむることはないさ」

有一が言った。

旅行の最後の日、私達はバリ島の浜辺で過ごした。

もう、五十をとうに過ぎている有一は、テレながらも少しおどけて、

「南太平洋の海にひざまで浸かりました。へそまで浸かりました」と笑った。

なつみも負けずに、

「南太平洋の波をつかまえました。持ち上げました」と笑った。

透明な水が、小さな魚が、熱い日ざしが、水平線が二人を包み込み、素直な気持ちにさせてくれたのだろう。

旅のはじめにジャングルは「何も言わなかった」なんて感想を書いたけど、あれはおおきな間違いだった。

ジャングルは饒舌だ。過去の都市も、賑わう人々も、滅び行くものも、よみがえる日々も、なにもかも語ってくれたような気がする。

ジョグジャカルタの町も人も市場も、なんと多くのことをなつみに語りかけてくれたことか。

夕暮れせまるころ、南十字星が水平線の少し上、まさに、やしの葉陰に姿を現した。

「さらばバウルよ、また来る日まで」

頭の中に、突然この歌が突いて出た。

星のまたたきが、夜空が、波の音が、二人をしあわせな気分にしてくれる。

「また来ようね」。

「いっぱい旅をしようね」。

あれから二十五年の月日が流れた。

今日は二人だけの金婚式。

子供には恵まれなかったが、いっぱい旅をした。

巨大なジャングルに呑み込まれそうになったことも、陽気なアメリカ人の後ろについてひたすら楽しんだことも……。

なつみにとっては、いっただって花をささげて祈りながら過ごした日々だったなあ。

完 (3, 600字)